I-14

大熊喜英の民家風住宅の源流
著作「民家との対話」,『暮しの手帖』掲載記事を中心とした考察
The Origin of Yoshihide Ohkuma's Japanese Folk-Style Housing Design
Considering through his literary work "Minka tono Taiwa" and article on "Kurashi-no-Techo"

里井レミ[1]
Remi Satoi[1]

Yoshihide Ohkuma is known as an Japanese architect who was attracted attention at his Japanese-folk style housing design in 1950s.His housing design has its origin in the field survey of traditional folk houses and villages all over Japan accompanying with his father Yoshikuni Ohkuma and the folklorist Wajiro Kon. Meanwhile, "Kurashi-no-Techo" -a life style magazine-was established by Yasuji Hanamori in 1948. This magazine had a firm policy of publishing no commercial pages in the magazine. This magazine preferred to publish Yoshihide's housing proposal because his design was based on Japanese life style.

１．はじめに

大熊喜英（1905-1984 年）は, 大成建設の設計部にて「熱海八方苑（1957 年)」「浅草寺本堂（1958 年)」「サッポロビール園ライラック館（1972 年)」「ニュートーキョー」などの設計を手がける一方で, 1950 年代の戦後復興期に日本の民家の手法を用いた住宅を発表し, 脚光を浴びた建築家である. その独特な作風は当時の建築専門誌のみならず, 主婦向けの雑誌『暮しの手帖』にも注目され多く掲載された.

本稿は, 大熊の著作「民家との対話」と生活雑誌『暮しの手帖』における掲載記事を通してみる, 大熊の民家への考え方とその住宅設計活動に関する報告とする.

２．大熊喜英と民家

大熊の民家の手法を用いた作風は、父･喜邦[1]と今和次郎が行った民家の集落調査に同行していたことが原点となっている. 大熊が早稲田高等学院在学中より 5-6 年に渡って続いた調査の中で大熊が手がけたスケッチは 160 枚にものぼり, 後に『民家との対話』[2]という一冊の本にまとめられる. その中で, 大熊は民家の特徴について「間取り, つくり方, デザインの三部門に分けて考えることができる. この三つのことが, うまくからみあって, 一体化した場合に, はじめて、われわれの考えているような民家の美しさというものが生まれてくるものである.」と記し, さらに, 民家は「いまなお生きた人間のくらしが, いとなまれている. なまはんかの鑑賞の対象としてはならない.」[3]とし, 日本人の長年の生活体験の積み重ねから生まれた民家の美しさや力強さに魅力を感じ, 敬意を払ってその手法を自身の住宅作品に用いていることが伺える.

３．『暮しの手帖』における住宅関連記事の概要

『暮しの手帖』は, 1948 年に戦後ジャーナリズム史において特異な編集人として位置づけられた花森安治（1911-1978 年）が編集長を務め創刊した主婦向けの生活情報誌である. この雑誌は創刊当初から現在に至るまで, 一貫して広告を掲載せず, 市場原理に左右されない生活者目線に立って情報を発信する新しいジャーナリズムの形態を生み出した.

『暮しの手帖』は, 衣食住生活全般の情報を網羅する雑誌であり, 創刊第 1 号から第 100 号（1969 年）までの約 20 年間に主な読者層であったサラリーマン家庭に向けた住宅の提案を積極的に行う. 1950 年代には建築家による 15 坪前後の小住宅の提案を平面図, パーススケッチ等と共に紹介している. 1960 年代には, 都市型住居の提案を行うと同時に, アパート関連の記事も増加し戸建住宅にこだわらない姿勢を示している.

４．『暮しの手帖』における大熊喜英の設計活動

西暦	48-50	51-55	56-60	61-65	66-69
柴岡亥佐雄	1				1
矢澤六雄		3			
清水一		7	1	7	1
大熊喜英		4		1	1
三輪正弘				1	1
風間秀雄				1	1
岡本敦				1	1

※登場回数が一回の建築家は除く

表 1『暮しの手帖』(1948-1969 年)における建築家の登場回数

『暮しの手帖』の中で, 建築家による住宅提案が盛んに行われていた 1950 年代に特に多く起用されたのが, 大熊喜英や清水一などの民家風の住宅を設計する建築家であった（表 1）.

第 18 号（1952 年）「三米角の部屋を六個集めた家」

1：日大理工･院（前）建築

（図 1-図 3）を例にとる. この提案の中で大熊は, 柱間を一間ではなく六尺六寸を基本とし, 京間に近い寸法で設計を行っているため, 4 帖や 5 帖でも広く感じる工夫を行っている. 居間, 寝室, 子供室などには畳敷きを採用し, 必要に応じてふすまを開け閉めすることで住宅全体に融通性をもたせた. 各室間のふすまは, 壁の中に完全に引き込めるよう工夫されており, ふすまを開けると家全体が一室の空間となり広く使う事ができる. 家事スペースは土間のように一段下げている板の間に集約される. また, 居間に向かって広い開口を設け, それに続く広いテラスを設けている. 天井も高く, 壁も最小限にとどめることで, 家全体を広く明るく感じさせ, 10 坪前後の提案で閉塞感を感じさせないプランである.

大熊は『暮しの手帖』における一連の掲載記事において, 民家のもつ一続きで広々とした良さを再現しつつ, タタミ, 板敷きの新しい組み合わせ方や広く設けた開口により民家の暗くてじめじめしたイメージを払拭し, 現代の生活に当てはまる新しいプランを紹介し続けた.

５．まとめ

大熊は, 日本人の暮らしの経験から生まれ発展してきた民家の実用的で経済的な側面を, 新しい技法と材料を用いて現代の生活に当てはめた設計を行っていたといえる. それは, 当時の建築専門誌を飾るようなそれまでにない新しく実験的な住宅というよりは, 新しい住宅の要素を取入れつつもそれまでの日本人の暮らし方の延長線上にあるような, 親しみのもてる住宅であったといえる.

大熊は民家について, 日本人の生活体験の積み重なりによって生まれたものであるということに最も重点を置いていた. そして自身の住宅設計方針も、ただ単に民家風の意匠を用いるのではなく, 生活者の経験に基づいて考えられたものである. あくまで生活に軸をおいた大熊の住宅設計への考え方は、生活者目線を貫く『暮しの手帖』とその編集長花森安治と共鳴し, 戦後の新しい住宅の提案を行う建築家と一般的な生活者とのを結びつける存在になりえたと考えられる.

６．注

注 1)大熊喜邦（1877-1952 年）は,大蔵省官庁営繕に従事し,国会議事堂の設計を始めとする多くの官庁舎の設計を手がけた.日本建築学会第 12 代会長.

注 2)参考文献[1]

注 3)参考文献[1]

図 3.『暮しの手帖』18 号「三米角の部屋を六個集めた家」外部スケッチ

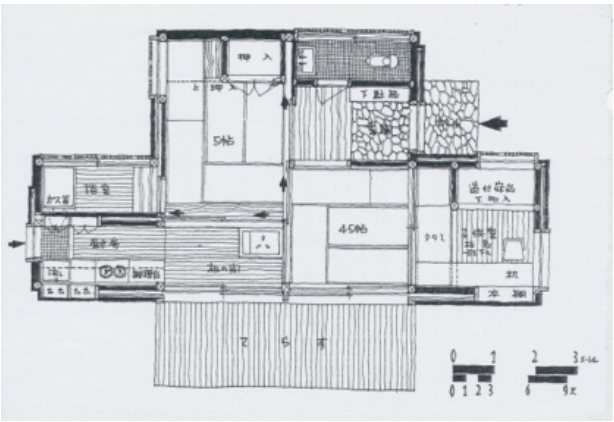

図 3『暮しの手帖』18 号「三米角の部屋を六個つめた家」平面図

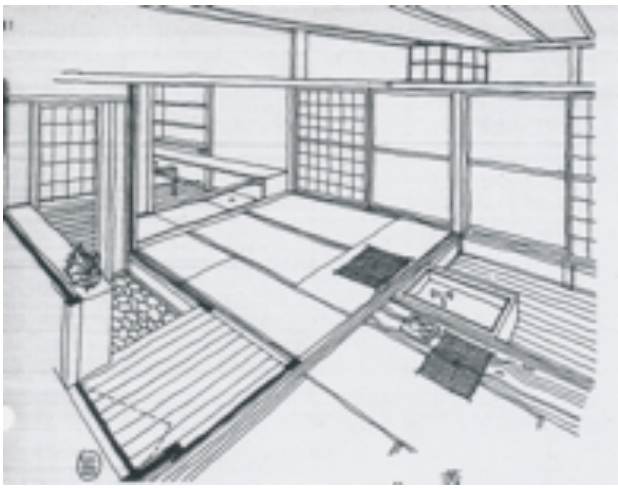

図 3.『暮しの手帖』18 号「三米角の部屋を六個集めた家」内部パース

７．参考文献

[1] 大熊喜英 :「民家との対話」,業文社,1974 年

[2] 大熊喜英:「和風（和風住宅の手法）」, 新建築, Vol.53, No.7, p142,p147, 1978 年

[3]「暮しの手帖」 暮しの手帖社、第 1 号 1948 年 9 月-第 100 号 1969 年